

一六〇一七世紀スペイン内在的自然主義と

日本思想の「接続」および「客体化」

折井善果

はじめに

この論考の目的は、二〇〇二年以降わが国でよく知られるようになった「接続された歴史」の理論が提唱する「同時代性」の概念に注目し、一六世紀後半から約一世紀にわたる日本カトリック¹キリスト教布教史（日本史においては通称「キリシタン史」と呼ばれる）における、当時のスペインの内在的自然主義と日本の自然主義との「接続」の事例について考察するための一試論である。

一 異文化間交流史における

「同時代性」について

S・スプラフマニヤムとS・グリュジンスキの「接続された歴

史 Connected History⁽¹⁾」の理論を援用し、「キリシタン史」をより広い世界的視野でとらえなおそうとする試みが近年行われた⁽²⁾。

この「接続された歴史」の理論は、接触する両文化の特徴を抽出して相互の違いや類似を議論するのではなく、地域間の混沌とした接続の在り方自体に焦点をあてる歴史理論である。接続によって有機的に起こる「相互的な」変化が考察の対象とされ、その相互的な変化が生じた要因の特定へと進む。その要因の特定の過程では、広い領域にまたがる「同時代性」すなわち地球上の異なる地域において発生した複数の現象の間の、同一原因の特定といったものも主眼とされてくる。

筆者は以前、キリシタン文学において神の摂理の欠如した状態を指す *caso* という原語が、「自然」と訳された事実が、背教者ファビアンをはじめとするキリスト教非合理論の重要な論点にな

っていることを指摘した³⁾。フアビアンはキリスト教を「非合理」に付すことに終始したが、この、フアビアンをはじめとする後の排耶論に多く共通する姿勢は、徳川封建社会勃興期の神・仏・儒の複雑な思想的状況を、一まとめに「合理的」なものに見せることに貢献している。キリスト教は「否定」されるべく「要請」された、あるいはキリスト教は当時の複雑な思想状況にとってある種の「溶媒 (Catalyze)」として機能した、など、さまざまな表現が考えられよう⁴⁾。

このような現象は、「受容」「拒否」といった異文化間の一方通行的な概念で説明することは難しいように思われる。一方「接続された歴史」の理論が提唱するのは、このように地域間の接続のあり方自体に焦点を当てつつ、その混沌の中で生じたさまざまな現象に分析を加えることである。

このような観点からキリシタン時代の日欧両思想の接続の現象を詳しく分析してみるならば、それは両者の「客体化 (Objectification)」の現象としてとらえられるのではないか。「客体化」とは、半知半解状態の自己の思想が、他者との出会いによって意識に上らしめられることとここでは定義したい。そしてその客体化の結果生じた意識が整理され (Rationalization)、自らの言語的用法へと還元され・内部化されていく (Internalization) という後続した現象が続く。フアビアンは、神の摂理の欠如した状態として「自然」が使用されたことに対して違和感を覚え、排耶書

『破堤字子』を著してその違和感に論理的な説明を付そうと試みるなかで、神的世界とのアナロジーに依存しない自然主義的道德世界に気づいた。そこで重要な意味を担う「自然の道理」という表現が徳川封建社会勃興期の自然的秩序の論理として採用されていく過程は、この、「接続」の過程でみられる「客体化」(およびそれに続く「論理化」「内部化」)の現象を表しているといえる。

さて、フアビアンの『柳ハ緑、花ハ紅、是自然ノ道理ナリ』(『破堤字子』)に代表される「じねん」をめぐる日本的心性は、後に述べるスペインの歴史家アメリコ・カストロが「神的内的秩序としての自然」と名付けたこの時代のスペインにおける混沌とした心性と余りにも多くのものを共有しているように思われる。神的内的共生としての自然が自主的に転化していくヨーロッパ近代への移行期と、「自然の道理」を掲げる日本の徳川封建社会思想の勃興期とはほぼ同時代であり、なおかつ両者の接続がイエズス会士を中心として実際に行われている。この事実、先に考察した通り、徳川封建社会の社会倫理思想の確立に関連づけられるのみならず、ヨーロッパ近代の自然観の萌芽に関連づけられるのではないであろうか。というのも、「接続された歴史」が提唱するのは、両文化の有機的な「相互変容」だからである。「相互変容」という、交差する二つの半円弧から伸びる二つのベクトルのうちの一方、すなわちキリシタン時代の日本の自然思想が、ヨーロッパ近代への移行期の混沌とした思想的状況にどのように

「接統」されているのか。以下はこのことを考察したい。

二 一六世紀スペインカトリシズム

における内在的自然主義

イエズス会を中心とするカトリック修道会の日本布教は、トリエント公会議（一五四五―一五六三）を経たスペインカトリシズムと日本との接統を可能にした。公会議は、改革派との対決姿勢を明らかにするのみならず、社会的混乱と病災の中、狂信と迷信のうちに取り残された民衆と、壮大難解な神学体系との乖離を食い止め、あのゴシック建築に見られる統合された秩序としての世界を再構築しようとする動きでもあった。神の超越と内在という中世スコラ哲学の命題を、存在論的・目的論的言語ではなく、キケロを模範とする古典ヒューマニズムの技術を駆使した説教の実践的言語で、民衆のことは（俗語）で説く試みである。それは人間に付与された言葉というアルテを駆使して神的真理に到達するというヒューマニズムの神学の実践でもある。

そこで重要な思想的伏線をなしているのは、「愛」の論理を媒介として自然と超自然、個別と普遍を関連づけるプラトンの再解釈の動きである。これに関しては、『黄金世紀スペイン国民文学史』の著者ブファンドルの言及が助けとなる。

プラトンは、愛の哲学において、個別的な美への賛美を一般的な美への愛へと変換し、最終的にそれを神的な美への高貴な

憧れへ昇華させた。ある肉的な美を愛しはじめた人間は、すぐにいかなる肉体的美をも認識するようになり、他の肉体的美の写しとして現れる。したがって美しいものはすべて彼の愛の対象であり、今や一存在の美しさを供するだけでなく、美の広大な海原に自らを運ぶであろう。「…」魂の美はただ、神の美の反映であり、それを完全に知ることは神性の知覚へと到達することに等しい。⁽⁷⁾

この世の美を賛美することによって超自然的な美に達する、という解釈は、教皇庁のスペイン大使としてカール五世の宮廷に仕えたイタリア人著作家バルタサル・カステイリオネ（一四七八―一五二九）、また『愛の対話』を記したユダヤ系スペイン人レオン・エブレオ（一四六〇？―一五二二）によって、キリスト教思想における被造物なる自然と神との関係にアナロジカルに採取された。

そしてこれをカトリック教義に密接に関連付けた人物として、日本のキリシタン文学の欧文原著者として名高いドミニコ会士ルイス・デ・グラナダ（一五〇四―一五八八）が挙げられる。⁽⁸⁾ ルイス自身、著作の中で、自分の神の愛についての言及は、プラトンの『饗宴』に由来していると述べている。⁽⁹⁾

以下はルイスの晩年の著作で、『信条序説第一巻』（一五八四）である。全体は「我天地の創り主を信す」に始まる使徒信条の各条項の解説という形式を用いた四巻構成で、まず、動植物・天

体・人間の生態の秩序と美しさの博学的な観察を披露し、それによって、それらを創造した神の摂理を感得させる。それによって第二巻以下の「信仰」論、「キリスト」論、「公同」論へと導く構成になっている。

第一巻では以下のとおり、利便 (uso)・結果 (fruto) という側面から世界を考察する目的論世界観に対比させるかたちで、楽 (recreación)・趣 (gusto) を強調する感質的・美的審美眼が披露される。

主は私の魂をその業をもって喜ばせる。そしてあなたの業を考ふる事を私は楽しむ。人間が受けるこの霊的な喜びは、被造物の美しさを見ながらも、それ自体ではなく、そこから神の美、意志、慈愛の知覚へと上昇していく。神がかような物を創つたのは利便のためだけではなく人間の楽しみのためでもある。¹⁰

「被造物それ自体ではなく」というところに、神の超越性を保持しようとする意図をうかがわせながらも、自然事物における神の内在性を、例えば月神といった文学的常套句によって暗示している。

海の潮の干潮を見ても、やはり驚嘆に値するのではなからうか。短い時間に満水し、次に定まった地点まで大変な激しさを以て戻っていく、つまりその満ち欠けに従って、ある時は満潮、次には干潮となり、その意思のままに大洋の波が動か

され、導かれる。

ここでいう「その意思のままに」(原文は por cuyo arbitrio) が「誰」の思いのままなのかをみてみると、関係詞 cuyo の先行詞は que la luna cresce y mengua (月の満ち欠け)であり、必ずしも神ではない。新大陸の無限の広がり、それに伴う新奇な自然事物の無限の発見に次々と驚嘆しながら、それらは神の無限という属性とアナロジカルに結びついている。神の無限という概念が、神性から派生した副次的現実としての自然とアナロジの論理をもって結びつき、自然に特権的な地位があたえられている。

この神の超越と自然的内在という主題は、教理文学とは性格を異にする同時代の小説・戯曲にあらわれており、きわめて大衆的な思维に及んでいたことが想像できる。

歴史家アメリコ・カストロ (一八八五―一九七二) は、スペイン思想史の名著『セルバンテスの思想』で、セルバンテスの著作にみられる「神の執事たる自然 (Naturaleza, como el mayordomo de Dios)」という表現に注目しつつ、そこに神的共生としての自然が自主的に転化していこうとするこの時代の人文主義的動向の反映を指摘している。¹¹ またセルバンテスの幕間劇『不思議な見世物』の以下の台詞を引用し、これを「生物学的自然法が人間世界(道徳的世界)に持ち込まれる現場」と名付けている。このようにしてこの時代の道徳観の根底にある自然思想を明らかに

している。

— 櫻の木にはどんぐり、梨の木には梨の実、「…」立派な人間には名譽、それ以外にはありっこございませぬわ。

— キケロ的な名言だ。一点も差引きするところがない。

しかしこのように文学作品に語らしめられている社会通念・道徳思想は、神学理論との重大なひずみを反映するものでもある。

すなわち、神的内的秩序として道徳律を個々の人間が自然として有しているのならば、なぜ罪を犯せようか、またそれを神は予知し許容しているのか、という、人間の「自由意志」に関する錯綜した神学論争である。この論争はカルヴァンを中心とした救霊予定説、すなわち人間が救われるか否かは人間の行いに関係なく神によって定められているのか否か、という問題にも関連するところから、時の話題として一世を風靡したといわれる。ティルソ・デ・モリーナ『不信心ゆえ地獄おち El condenado por desconfiado』やカルデロン『人生は夢 La vida es sueño』など、この問題を主題として数多の戯曲が著されている。

三 日本的自然思想との「接続」

このヨーロッパ世界に展開された教義論争は、日本のキリシタン史と係わりがないわけではない。その影響は実際日本布教地にも及び、これらの論争が蔓延することを回避しようとする動きが宣教師の間であったことも知られている。一五九〇年に来日した

イエズス会士ベドロ・デ・ラ・クルス（一五九一—一六〇六）は、天正少年使節と共に待機していたリスボンで、実際にモリーナと対談しており、そのモリーナと同じ見解に与する近世スコラ学の大成者フランシスコ・スアレスの学説の誤りを主張して、彼らの学説を日本に浸透させないよう巡察師ヴァリニャーノに要請している。⁽¹⁴⁾

この神の予定に関する問題には、キリシタン版の編纂にも影響を及ぼしている。キリシタン版『ぎやどべかどる』において、神の予定の問題に関する言及が翻訳の際に削除されている事実は、日本人信徒を混乱させないための配慮でありつつ、ヨーロッパと同様の論争が起きる可能性を察知し、それをできる限り回避しようとした布教側の意図といえるであろう。

有名な背教者日本人ファビアンが著した排耶書『破提字子』、背教イエズス会宣教師フェレイラ（沢野忠庵）に帰される『頭偽録』は、この日本における削除という手段を用いたヨーロッパの神学理論の行き詰まり、あるいは神学理論と思想的状況の背反性を「自然の道理」という言葉に集約された日本の思惟をもちいて結果的に突いたことになる。彼らは、キリシタン版の編纂あるいはそれを用いた実際の布教活動を通じた日欧両思想の己のうちの「接続」の結果、神的世界とのアナロジーに依存せずに完結している自然主義的道德世界に気づき、それを「自然の道理」と名付けた。

さて、その「気づき」が、日本においては徳川封建社会勃興期の自然的秩序の論理の形成に、自己の思想の「客体化」の契機を与えたという点は先に主張した。ではその逆のベクトル、すなわち、急速に啓蒙の時代へ進みつつあったヨーロッパ世界の自然観・神観に、この「気づき」が何らかの関係性を持っているといえるであろうか。もちろんファビアン、フェレイラの言及が直接影響を与えたというわけにはいかない。しかし、宣教師の記した日本宗教研究、日本情報、ヨーロッパで流通する中で、第二のファビアン、フェレイラが生じ、自己の依拠する世界観の「客体化」が生じていったとするならば、それはキリシタン時代の日欧両思想の「接続」の結果生じた「相互的な変容」を明らかにすることになるのではないだろうか。

四 ビエール・ペール 『歴史批評辞典』

この点に関しての考察は未だ不十分であり、キリシタン時代あるいはそれ以後のヨーロッパにおける日本情報の流布状況についての詳細な研究が必要であることを認識しつつ、以下の例だけ提示したい。

フランスの啓蒙思想家で、カトリック教会のドグマティズムを批判したビエール・ペール（一六四七—一七〇六）は、当時のヨーロッパに流布していた日本情報、おもにイエズス会士アントニオ・ポッセヴィーノ（一五三三—一六一二）の『精選文庫（*Bibliotheca Selecta*）』をもとに日本の宗教についての言及をしている。

ポッセヴィーノの日本情報は、その構成と内容を瞥見する限り、一五八六年にリスボンで出版され、当時日本語にも訳されたイエズス会日本巡察師ヴァリニャーノの『Catechismus Christianae fidei』（キリスト教信仰のカテキズム）に基づいており、この二人はパドヴァ大学時代の同僚でもある。ペールはポッセヴィーノに基づいて日本には12の宗派または12の宗教があるとし、そのなかで主だったものとして三つ、すなわち①現世以外の生を期待せず、感覚を持つもの以外に実体を認めない宗派、②魂の不滅と来世を信じる宗派、③釈迦崇拜者、を挙げ、そのあとで以下のように述べている。

一部の著作家に言わせると、日本の諸宗派についてないうる一番一般的な区分は、或る派は外見にとどまることを主張するが、或る派は感官を持たない・真理と呼ぶところの實在を求め、と推定することであるという。外見にとどまる派は、善人が永遠に報いられ悪人が永遠に罰せられるように、現世のあとに来世を認める。しかし感覚でとらえられぬ内的な實在を求めめる派は、天国や地獄を否定し、スピノザ説と多分に似たことを説いている。⁽¹⁸⁾

この言及に関して、以下のような注を自ら加えている。スピノザも教えなかったことがここに多々あるのは間違いないが、しかし、スピノザが日本の祭司たちと同じく、万物の

第一原理と宇宙を構成する全てのものは単一の同じ実体にする
がないとか、万物は神であり、神は万物であり、したがって
神と存在する万物は単一の同じものにすぎないとか教えたこ
とは極めて確実である。(同上)

スピノザの「万物は神であり、神は万物である」という汎神論
的言及が、宣教師の日本体験とそれをもとに編まれた書物を通じ
て日本思想と接続されている一事例である。ペール自身、スピノ
ザについて多くの言及をしており、「古今のヨーロッパや東洋の
哲学者の影響を受けているが、全く新しい体系と方法を持つ無神
論者」とし、それを中国の哲学、日本の哲学と比較検討している
点が注目される。キリシタン時代の日欧両思想の接続が、ヨーロ
ッパ近代の思想的展開にある種の「変容」の要因をもたらしてい
ることを示す一例といえないであろうか。

おわりに

徳川封建社会勃興期の一般的な普遍的な社会思维様式とされる
「自然的秩序」の論理の形成は、キリシタン時代の自然解釈をめ
ぐる日欧両思想の「接続」の結果生じた己の思想の「客体化」の
過程としてとらえられる。それと同様に、スペイン・カトリシズ
ムに代表される内在的自然主義から、近代ヨーロッパの啓蒙思想
家による汎神論的自然思想が意識されていく過程には、同じくキ
リシタン時代の自然解釈をめぐる日欧両思想の「接続」が少な

らず関与している。本論考はこの構図を若干の例をもとに提示し
た試論に過ぎない。

- (1) S・スブラフマニヤム「テリジョ河からガンジス河まで——一六世
紀ユーラシアにおける千年王国信仰の交錯——」岩波書店編『思想』
第九三七号、二〇〇二年、三一—七〇頁、S・グリュンスキ「カ
トリック王国——接続された歴史と世界——」同右、七一—一二六頁
- (2) 平成一七年度——一八年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成
果報告書「一六—一八世紀イエズス会現地報告文書にみる「普通主
義と地域特性」競合の国際比較」平成一九年三月、研究代表者 川
村信三上智大学助教授
- (3) 拙稿「キリシタン文学における「自然」——スペイン語原典におけ
る「偶然」(accidente)の翻訳を手がかりに」『比較思想研究』(比較思
想学会)第三三二号、二〇〇六年、九一—一〇〇頁
- (4) 例えば、日本文学史上初のベストセラーといわれる仮名草子『清
水物語』(寛永一五)の冒頭である。「翁曰、我が朝の人の心は唐土
の人よりも直し易く候はん」と覚え候。其子細は世に分もなき事は、
吉利支丹といふもの程、分けの聞こえぬものはなきに、其勤めを聞
き入れたる人は命にもかへ候。「……斯様の目にも見えぬ事にさへ、
教へに移る人の心にて候へば、いはんや天地の道理、目の前の事に
て私なき理には、誰人か背き候はんや。」(渡辺守邦、渡辺憲司校注
『清水物語』『仮名草紙集』新日本古典文学大系、岩波書店、一九九
一年、一四七—一四八頁)
- (5) キリシタン信仰に「非合理性」という特性を付与することにより、
己の思想が「合理化」される、という現象がここでは生じている。
第一二回ヨーロッパ、日本学研究会国際大会(The

光沢編『日本のカテキズモ』天理図書館、一九六九年

(18) 野沢協訳『ビエール・ペール著作集』第四巻、法政大学出版社、

一九八四年、三五六―三六四頁

<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k50440b/f326.table> (p.326)

(おりい・よしみ、スペイン思想、日本大学専任講師)